

ST養成校の音響学の思い出調査*

○竹内京子（順天堂大），青木直史（北大），荒井隆行（上智大），△鈴木恵子（北里大），
世木秀明（千葉工大），△秦若菜（北里大），安啓一（筑波技術大）

1 はじめに

言語聴覚士（ST）ということばのリハビリを行う職業の養成校では、音響学が必修科目であるが、音響学を苦手とする学生が非常に多い[1]。先行研究は一部の養成校の結果であるので、一般的なことではあるとは言えない。

本発表では、現役 ST 対象の音響学の講習会に、日本全国から参加した様々な養成校出身、様々な年代の ST に対して、音響学・聴覚心理学の苦手度を調査した結果を報告する。さらに、各科目内の分野別傾向も概観する。

2 「STのための音響学」講習会

2.1 講習会開始のきっかけ

2020年度より、科研費による ST 養成校の音響学の授業をよりよいものにするための研究を進めている。ST 養成校の音響学の授業は、学生の苦手科目の筆頭であると言われているからである。

研究を進める上で、音響学を教える教師自身が今後、何をしなければならぬのか、何を改善しなくてはならないのかが分からない状態であることが分かった。なぜならば、音響学教師は、言語聴覚療法の知識がなく、現役の ST が行っていることを知る機会もない。それゆえ、ST の臨床に役立つ音響学というものがイメージできないのである。

また、現役 ST で、臨床において学校で習った音響学の内容を応用しているという方がとても少ないようであるが、現役 ST の音響学に関連する活動の調査は過去においてされていない。それゆえ、どのような内容が求められているのかを調査し、実際の養成校の授業にフィードバックするため、「STのための音響学」という講習会を開始した。第1回「STのための音響学」ははじめの一步（2021年3月開催）と第2回講習会 音声の録音・保存方法（2021年5月開催）において、今回の調査

のためのアンケートを行った。

2.2 臨床で使っているかどうか

音声の音響分析は、音響学の内容が一番、臨床と結びつくイメージを持ちやすいものであろう。第1回 ST のための音響学の参加者を募集時に、講習会の内容から、音響分析ソフトの使用経験を尋ねた。講習会申し込みをした ST で日常的に活用している者は少なく、使用したことがない者も多かった。

3 音響学・聴覚心理学の思い出調査

3.1 方法

講習会終了後に、講習会の内容の感想や分かりにくかった点についての質問と共に、現役 ST 56名と養成校学生5名ですでに音響学・聴覚心理学を受講した者61名に対して、音響学・聴覚心理学の思い出調査を行った。養成校の音響学・聴覚心理学それぞれに、簡単だった(1)・難しかった(5)（5段階）、好きだった(1)・嫌いだった(5)（5段階）で答えてもらった。

Fig. 1がその結果である。

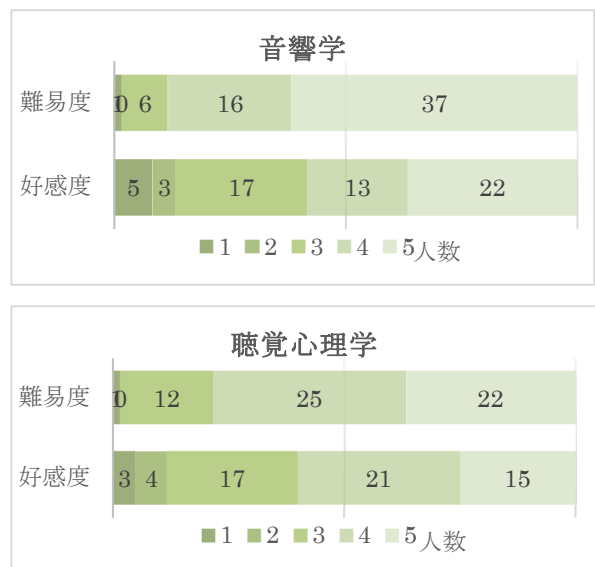


Fig. 1 難易度・好感度（人数）

* Impressions of acoustics class in the speech therapy course., by TAKEUCHI, Kyoko (Juntendo University), AOKI, Naofumi (Hokkaido University), ARAI, Takayuki (Sophia University), SUZUKI, Keiko (Kitasato University), SEKI, Hideaki (Chiba Institute of Technology), HATA, Wakana (Kitasato University) and YASU, Keiichi (Tsukuba University of Technology).

3.2 音響学の結果

約 88%が難しかったと解答した。しかしながら、「好きだった・嫌いだった」のグラフを見ると、難易度のグラフと比較して、嫌いだったという回答が減っている。難しかった記憶があるが、実は興味はあったということが読み取れる。そのことを示すように、今回の講習会には、これから音響分析を初めてみようという者が多かった。

3.3 聴覚心理学の結果

易しかった、好きだったという解答は、音響学と同様に少ないが、音響学と比較すると、極端に「難しかった、嫌いだった」という記憶は少ないのが特徴である。

4 より詳細な苦手分野の調査

4.1 方法

さらに、第2回講習会のアンケート回答者（現役 ST42 名）に、養成校の音響学・聴覚心理学で苦手だった項目とこの講習会で復習したい項目を選択してもらった。国試の出題基準[2]の音響学 5 項目、聴覚心理学 3 項目に分け、それぞれ複数選択可とした。

4.2 結果

全項目の苦手度が高く、復習したいと思っているようだが、その中でも「音の物理的側面」の苦手度がやや高く、「音声の音響分析」を復習したいと考えているようだ。

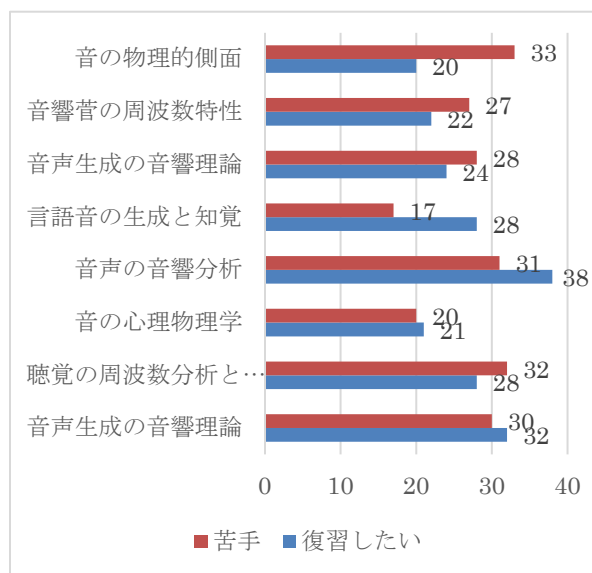


Fig. 2 苦手分野・復習希望分野 (人数)

5 考察

今回の全国様々な養成校出身の ST と養成校学生の結果は、音響学・聴覚心理学ともに、

難しかったと感じており、先行研究の特定養成校の学生に対する調査と同様であった。また、聴覚心理学という科目がなく、音響学と同じ内容が含まれて教えられている学校も多いことから、音響学という科目名に対する反応として、より難しいと感じているのかもしれない。

以上の2調査の結果から、難易度に対して、好感度はやや高いという結果は、今回の ST のための講習会の参加者が想像以上に多かったことにつながる。現役 ST にとって、音響学は、難易度はあるが、興味のあるもの、機会があれば実践してみたいものという好意的な見方もできる。

6 おわりに

今回の調査は予想通り、ST 養成校の思い出では、音響学と聴覚心理学ともに、難しく、嫌いだったという結果が出た。半面、養成校卒業後、多くの臨床で活躍する ST が、今回の講習会に参加したように、予想に反して、音響学に興味を持っていたという結果が出た。先行研究の養成校学生の調査で、「すべての科目が好きなのは、音響学が好き」[1]という結果とつながるのかもしれない。今後は、音響学教師が、この興味にどのように答えられるかについて、講習会の参加者の ST とともに考え、実際の授業に反映させていきたいと考えている。

謝辞

本発表は、言語聴覚士養成課程における「音響学教育」の現状調査と授業ガイドライン、教材作成(科研費番号 20K03074)と声道模型を中心とした音響学・音声科学の教育と ICT の融合(科研費番号 21K02889)の成果である。「ST のための音響学」講習会に対する日本音響学会 音響教育委員会、日本音声学会、東京都言語聴覚士会の後援に感謝する。

参考文献

- [1] 竹内京子, 越智景子, 音声学・音響学への関心度, 苦手度実態調査言語聴覚士養成校学生のアンケートから, 日本音響学会研究発表会講演論文集 CD-ROM, 2015
- [2] 言語聴覚士国家試験出題基準平成 30 年 4 月版, 公益財団法人医療研修推進財団監修, 医歯薬出版, 2018